

## W-3-4

# 「かのように」の見えづらさから見えてくるもの

田中太一（東京大学大学院）

t.tanaka6002@gmail.com

### 1. 本発表の目的

認知言語学では、言語表現の意味は指示対象に尽きるのではなく、概念化の主体の捉え方もまた意味の重要な側面であると考えられる。この考えは、たとえば (1)・(2) のようにまとめられる<sup>1</sup>。本発表であつかう「かのように」性は、特に (1) に関わるものである。

- (1) 異なる対象に同じ捉え方を適用して捉えることが、異なる対象に同じ言語表現を適用することが可能になる仕組みの1つである。 (本多 2016: 264)
- (2) 同じ対象に異なる捉え方を適用して捉えることが、同じ対象に異なる言語表現を適用することが可能になる仕組みの1つである。 (本多 2016: 266)

国広 (1985: 8) は (3) などの例を、「客観的に見れば物の動きはあり得ないのに、あたかも動いたかのように捉えている」表現として分析し、このような捉え方に「痕跡的認知」という名称を与えている。ここで問題になるのは、「あたかも動いたかのように」ということの内実である。(3) は、別の場所に存在していた「町の主だった建物」が駅前に実際に移動した場合であっても用いることができるため、(1) の適用事例と見なすことができる。(3) の話し手は、実際には移動が生じたわけではないということを踏まえつつ、移動が生じたかのように捉え、聞き手に伝えている。もちろん聞き手は、(通常は) 移動が生じたとは考えず、建物の空間的配置を正しく理解することができる。移動が生じていないということを意味の一部としつつ、移動が生じているかのように捉え、伝えるというのは、あからさまな矛盾のようにも見える。本発表では、このような「かのように」捉え・伝える過程がどのようなものか、そしてそれが通常（研究者にとっても）意識されづらいのはなぜかを検討する。

- (3) 駅前に町の主だった建物があつまっている。 (国広 1985: 10)

### 2. コミュニケーションにおける「かのように」

本発表では、言語によるコミュニケーションを、話し手が言語的・非言語的の手がかりを提示することで聞き手の注意を意図した対象へと向ける過程として規定する<sup>2</sup>。その際、対象は手がかりによってカテゴリー化されている。話し手は、聞き手に対し、手がかりによってカテゴリー化される対象へと注意を向けるように指示しているのである (Langacker 2000, Scott-Phillips 2014)<sup>3</sup>。この過程は、たとえば次のようなものである。

<sup>1</sup> 発表者は、(1)・(2) における異なる対象・同じ対象の位置づけについて、本多 (2016) とは異なる立場をとっている。詳細は、第4節および、田中 (2020: 注6) を参照されたい。

<sup>2</sup> 代表的な非言語的の手がかりとして、視線や指差しが挙げられる。

<sup>3</sup> 正確に言えば、手がかりへと注意を向けるように指示してもいることになる。この指示のためには更なる手がかりが必要であり、その手がかりに注意を向けるためには更なる手がかりが必要となるという仕方で突き詰めていくと、結局のところ無限の手がかりが必要になる。私 (たち) が現にコミュニケーションが可能である以上は、この後退は何らかの仕方で解消されているはずである。この課題への対処法としてさまざまな議論が提出されている。詳細は三木 (2019) を参照されたい。

ペットのタマを指差して (4) のように発話する場合、話し手は (通常指差しを伴う) 「あの猫」という手がかりによって特定の猫 (タマ) に聞き手の注意を向け、更に「(あの猫は) うちのペットだ」という手がかりによって、当の猫が話し手のペットであるという事態へと聞き手の注意を向けている。

(4) あの猫はうちのペットだ。

この際に重要なのは、話し手が聞き手の注意を向けようと意図した対象は、手がかり以上の細部を含むということである。タマはもちろん猫カテゴリーの一員ではあるが、「猫」の慣習化した意味以上の具体的な細部を持つ。このことを野矢 (2011: 第 23 章) は典型例にかんする通念としての「典型的な物語」という概念を用いて巧みに表現している。たとえば、野矢は鳥の典型的な物語について次のように述べている。

(5) ふつうの森ないし水辺に生息しているか、あるいはふつうの人にふつうに飼われていたりするだろう。ふつうの動物園にもいる。ふつうの焼鳥屋でふつうに変わり果てた姿となり、ふつうのおじさんの腹におさまっていきもする。それは図鑑の中の鳥の姿などではなく、むしろ鳥にまつわるきわめて多様な通念の全体と言うべきである。 (野矢 2011: 411)

タマはあらゆる点で「ふつう」の猫であるわけではない。というよりも、あらゆる点で「ふつう」である対象など実在しないと考えるべきだろう。「現実はずねに、典型的な物語をはみ出している」(野矢 2011: 405) のである。コミュニケーションにおいて提示される (言語的) 手がかりは、それによってカテゴリー化される対象の属する「典型的な物語」、すなわち、その相貌を決定づける主要因である。たとえば (4) であれば、そこに存在する対象は「猫」の相貌を持って、言い換えれば「猫」として立ち現れるのである。このことは、(6) との対比によってより良く理解することができる。

(6) あの哺乳類はうちのペットだ。

ペットのタマに、「(あの) 哺乳類」という手がかりによって聞き手の注意を向けるということは、対象を「哺乳類」の相貌を持つものとして提示するということである。普通の猫が「哺乳類」として提示されることはあまりない。それは、「猫」というより対象との一致度が高い相貌をもたらす手がかりが存在するからである。「猫」は「哺乳類」と比べて相対的にペットのタマに近い。とはいえ、タマ (の持つさまざまな特徴) は「猫」としての相貌に尽きるわけではないという点が重要である。

ここには「かのように」性が非常に見えづらい形で存在している。すなわち、ペットのタマには「猫」や「哺乳類」の (慣習化した) 意味に収まりきれない細部が存在するにも関わらず、あくまで「猫」や「哺乳類」である「かのように」提示されているのである。このような意味では、ほぼ全ての発話が「かのように」性を持つことになる。しかしながら、大部分の手がかりについて「かのように」提示されたものだと意識されることは稀である。コミュニケーションにおいては、手がかりが対象へと適切に注意を向けられるものとして提示されること自体が慣習化している。話し手は、対象が手がかりによって適切にカテゴリー化される (適切な相貌を与えられる) というのを伝えると同時に、手がかりが対象を適切にカテゴリー化しようと

いうことも伝えているのである。このことは、言語の使用がその使用の適切さを示す事例の存在からも確かめられる。たとえば「背が高いってどういうこと？」という問いかけに対し「太郎は背が高い」と答えることができる。これは、太郎自身に関する叙述であるとともに、「(背が) 高い」という述語の適切な使用を示すものでもあり、やり取りを通じて聞き手は自身の「高い」にかんする知識を更新することができるのである (Ludlow 2014)<sup>4</sup>。手がかりは対象をカテゴリー化することを通じて、自身の意味を変化させていく。「かのように」語っていることが見えづらくなる要因の一つは、発話によって提示された手がかりと、話し手の意図した対象との間で相互調整が行われ、ずれが縮小されることにある。

### 3. カテゴリーの中心と周縁

カテゴリーのメンバーはそれぞれ典型性において異なっている。たとえば、スズメやツバメは鳥カテゴリーの典型的 (中心的) メンバーだが、ペンギンやダチョウは非典型的 (周縁的) メンバーである。私 (たち) はカテゴリーの構成そのものを主題としたコミュニケーションを行うことがある。これは、「典型的な物語」の明示的調整だと考えられる。坂原 (2002) はカテゴリー内での差異 (あるいはその否定) を表現するものとして、差異化トートロジー (7) と、同質化トートロジー (8) を挙げている。(7) では、ネコであるための基準として、ネズミを捕ることを (新たに) 提案しているのに対し、(8) では、そのような基準による分断を退け、あくまで一つのカテゴリーを均質に扱おうと提案するものだと分析される。鳥について同じことを述べるならば、(9)・(10) のようになるだろう。(9) は飛ぶことを基準にダチョウやペンギンを鳥カテゴリーから排除するものであり、(10) はそのような基準を退け、ダチョウやペンギンであっても鳥カテゴリーの一員と見なすものである。

(7) ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ。 (坂原 2002: 112)

(8) ネズミを捕らなくても、ネコはネコだ。 (坂原 2002: 113)

(9) 飛んでこそ、鳥は鳥だ。

(10) 飛ばなくても、鳥は鳥だ。

私 (たち) は現に、ダチョウやペンギンを鳥と見なすカテゴリーを習得している。たとえば、ある動物園にかんするクイズとして、「この動物園に鳥は何羽いるでしょう」と問われたとしたら、典型的な鳥だけでなく、非典型的な鳥も数えることになるだろう。しかしこのことは、当然のことながら典型例と非典型例の区別を否定するものではない。「ペットに鳥を飼っています」と言っている人が、ダチョウやペンギンを飼っていたら、(間違いとは言わないまでも) 不適切な発話だと感じるだろう。では、非典型例をカテゴリーの一員と見なすとき、私 (たち) は何を行っているのだろうか。カテゴリーは一般に、「典型的な物語」を共通のフレームとして、そこに含まれる要素が相互に結びつくことによって構成される。非典型例は、物語の一部を非典型的なもの置き換えることで、適切に位置づけることができる。ダチョウやペンギンを「飛ばない」という仕方で特徴づけることが有意味であるのは、一度は鳥の「典型的な物語」に位置づけた上で、そこからのずれを欠如として捉えているからに他ならない<sup>5</sup>。すなわちここには、典型例と同じく「典型的

<sup>4</sup> この例では、高いと見なすために必要な高さを示す使用が典型的であるが、そもそも高いとはどのような性質なのか (たとえば太いとはどのように違うのか) を示すことも可能である。

<sup>5</sup> たとえば、パソコンや水差しも飛ぶことはないが、飛ばないという仕方で特徴づけることが有意味である状況は少ない。

な物語」に当てはまるかのように捉えつつ、そこからの逸脱を把握する過程が存在するのである。

(11) についても同様に考えることができる。「あつまる」の典型例は、対象の移動を含むものである。この例では建物が実際に移動しているのではないという点で非典型的な「あつまる」の事例であり、「典型的な物語」からの逸脱が生じていると言える。このように、非典型例をカテゴリー化する際には、典型例であるかのようにカテゴリー化し、さらにそこからのずれを把握する過程が存在する。この過程が全体として慣習化している場合に、「かのように」性が見えづらくなるのである<sup>6,7</sup>。

(11) = (3) 駅前に町の主だった建物があつまっている。 (国広 1985: 10)

#### 4. 私たちには何が「見え」ているのか

本多 (2005: 5.6.3) は、次のような例を図と地の反転と見なす分析を批判している。その理由は、「それぞれのペアにおいて話し手はどちらの文でも状況と同じ視座から見ている」および「どの例においても話し手の姿が話し手自身の視野の中に含まれている」と考えることになる」(本多 2005: 110) というものである。たしかに、(12)・(14) では話し手が明示的に表現され注意の対象となっているのに対し、(13)・(15) では主体的に捉えられ注意の対象とはなっていない。「見え」には客体として捉えられている対象のみが含まれると規定する限りにおいて、本多の批判は正しいと言える。

(12) We can handle this car smoothly.

(13) This car handles smoothly.

(14) We are approaching Kyoto.

(15) Kyoto is approaching.

本多は生態心理学の知見を踏まえ「言語において、音形をもった形式によって表現できるのは、話し手の視野の中に含まれるものに限られる」(本多 2005: 25) と述べている。問題になるのは「視野の中に含まれている」ということの内実である。(16) が事態の直接的知覚に基づいて発話された場合、話し手に見えるのは机のある面と本のある面同士の関係であろう。机にせよ本にせよ、一度に見ることのできる面は限られており、一方が他方の「上にある」という関係もまた不完全にしか知覚されていないことになる。このことを正確に言語化するならば、(17) を基盤として、見える限りの情報(の一部)を付け加えたものとなるだろう。

(16) 机の上に本がある。

(17) ある具体的な輪郭とある具体的な輪郭がある関係を具体化している。

もちろん、私(たち)は普通、机の上に本があるということを伝える際に(17)のように言ったりはしない。机は机として、本は本として、「上にある」は「上にある」として知覚されている。このことが可能で

<sup>6</sup> 具体的な言語表現としては新奇であっても、スキーマの水準(e.g. [建造物]が[移動]している)では慣習化している場合もありうる。

<sup>7</sup> たとえば、創造的な隠喩では、ずれの解消を新たに行う必要があるため「かのように」がはっきりと分かる形で提示される。

あるためには、ある視座からの「見え」には、別の視座からの「見え」が組み込まれるのでなければならない。私（たち）には机の特定の面が見えている。この面は、(想定された) 別の視座からの面と統合され、机の像を結んでいる。この際には、それぞれの視座の位置関係を把握することが不可欠である。仮に、複数の視座からの見えが与えられたとしても、視座同士の位置関係が把握されなければ、対象が一つの像として統合されず、独立の見えが立ち並ぶだけだろう。話し手が実際にとっている視座は、無数の可能な視座の内の一つとしても位置づけられているのでなければならない。

ここで再び、図と地の問題について考えてみたい。(14)の話し手が、同じ状況を(15)としても表現できると知っているのであれば、どちらを発話するか選択することが可能である。その際には、自身が見えに含まれる(14)と含まれない(15)との両方を含んだ全体としての見えのなかで、どこを焦点とするかを選択することになる。すなわち、図と地の反転(より正確に言えば、共通の地における図の選択)という関係にあると考えられる。本多(2005:112)は、このような想定を、「話し手の言語知識の中に、分析者であるわれわれが占めるべき位置が確保されていると考えるのは不自然な想定である」として退けているが、(14)と(15)のいずれかを選択する過程を認めるのであれば、ここにあるのは、「見え」によって意味することの範囲に何を含めるかという用語法上の問題に過ぎないように思われる<sup>8</sup>。

(15)は、それ自体は移動することのない京都が「知覚者の移動に伴って、知覚者の視野においては移動するものとして立ち現れる」(本多2005:265)文である。ここでは、話し手は、京都が実際に移動しているのではないということもまた聞き手に伝えようと意図しているという点に注意しなければならない。たしかに話し手自身の視野において京都は移動している。しかしそれはあくまでも話し手の経験において生じた事態であり、世界における公共的な事態ではない。期待される聞き手の理解は「話し手は移動しており、それにより京都が移動するという視覚的経験をj得ている」という程度のものである。このことを、本多(2005:26)は、エコロジカル・セルフのレベルで捉えられた話し手が「ゼロ形として表現されている」と分析している。

(15)は話し手自身の視座が移動していることを意味に含んでいるため、たとえば「今どの辺りにいるの？」などの問いかけへの返答として用いることができる。その場合、話し手が聞き手に伝えようとしているのは、話し手の現在地であり、そのことの手がかりとして京都が近づいてきたという見えを提示しているのである。また、(15)は(現実には考えづらいことではあるが、)京都が何らかの意味で実際に移動している場合にも用いることができる。たとえば、大規模な地殻変動によって京都を構成する土地が実際に移動している場合や、京都府の行政区分上の範囲が拡大し続ける場合などには、話し手の視座は固定されたまま、京都の移動が経験されることになる。聞き手はこうした様々な状況や、(14)との視座の違いを踏まえて(15)を理解することになる。手がかりとしての言語表現はあくまでも見えの一部を焦点化しているのであって、その背後には見えの全体が(程度の差はあれ)潜んでいる。つまり、見えの全体を踏まえた上で、焦点化された部分によって対象をカテゴリーできるかのように提示しているのである<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 言うまでもないことではあるが、図と地という用語を、本多の用語法での見えにおける区別に限定して用いること自体に問題があるわけではない(それどころか、極めて正当な用語法でありうる)。しかしその場合であっても、本稿で述べたような複数の視座の関係は枠組み全体のどこかで扱わざるを得ないだろう。

<sup>9</sup> 佐藤(1986:323)は「生の現実」(A)を表す内容語群(B)からなる複数の表現(C, D, E, F)について、「Cの構造の文を読むとはそれがDでもEでもFでもありえたはずだということを読みとる作業にほかならぬ」と述べている。Aを表しうるBは複数(というより無限に)存在するのだから、Bからなる表現の背後には、B', B'', B'''……が存在することになるだろう。あらゆる言語表現は、必然的に事態の一側面に過ぎないのであり、そのこともまた私(たち)は理解しているのである。(最広義の「代換」(佐藤1978)はこの理解のもとに成立していると考えられる。

## 5. 伝え方の意味論に向けて

(18) を発話する際、話し手は、家財道具の焼失（あるいは空襲によって家財道具が焼けることの全体）というコントロール不可能な事態が自らの責任で生じたかのように語っている。(外形上) 同じ事態は (19) によっても表現することができる。すなわち、(18) を発話する際には、(多くの場合) その見えのうちに (19) が存在すると考えられる<sup>10</sup>。この例では、話し手が家財道具の焼失に対して心底責任を感じている場合であっても、その責任が聞き手自身の視座から焦点化されることまでは意図していないことがありうる。その場合には聞き手に (20) のように返答されたら、反論はできないものの釈然としない気分になるだろう。話し手は、自身の視座からは (18) が焦点化され、聞き手の視座からは (19) が焦点化されるということの全体に聞き手の注意を向けようとしていたのである。一つの視座から焦点化されたことがらを表現することによって、別の視座からの焦点化をも表現するという点で、このようなコミュニケーションも「かのように」性を持つことになる。

- (18) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。 (井上 1976: 66)  
(19) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼かれてしまった。  
(20) そうですか。あなたたちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまったんですね。

私(たち)が聞き手の注意を向けようと意図する対象のすべてに対応する手がかりが予め用意されているわけではない。コミュニケーションでは基本的に、伝えたいことのごく一部を焦点化するという方策を取らざるを得ない。そのため、聞き手は手がかりと意図された対象(の候補)をそれぞれ調整し、話し手の意図(話し手自身が聞き手に提示する見え、及びその焦点化)を理解することになる。ここには手がかりとしての言語記号の調整と、意図された対象の調整がともに含まれている。「伝え方の意味論」では、使用事象におけるコミュニケーションの過程全体が言語表現の意味に何らかのしかたで貢献していると考えられる。いわゆる「捉え方の意味論」においては、(コミュニケーションを重視する立場であったとしても)話し手の捉え方がどのようなもので、聞き手の注意はどのように操作されるのかが関心の中心であったために、言語表現と捉え方が直接に結びついてしまい、「かのように」性が把握しづらくなるという問題がある。「伝え方の意味論」はこのような困難を乗り越えるものである。

## 参考文献

- 本多啓 (2005)『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会。/本多啓 (2016)「間主観性状態表現」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』: 254-273. 開拓社。/井上和子 (1976)『変形文法と日本語・下』大修館書店。/国広哲弥 (1985)「認知と言語表現」『言語研究』88 : 1-19。/Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow et al. (eds.) *Usage-based models of language*, 1-63. CSLI Publications。/Ludlow, Peter (2014) *Living words*. Oxford University Press。/三木那由他 (2019)『話し手の意味の心理性と公共性』勁草書房。/野矢茂樹 (2011)『語りえぬものを語る』講談社。/坂原茂 (2002)「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫(編)『認知言語学Ⅱ: カテゴリ化』: 105-134. 東京大学出版会。/佐藤信夫 (1978)『レトリックの消息』白水社。/佐藤信夫 (1986)『意味の弾性』岩波書店。/Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds*. Palgrave MacMillan。/田中太一 (2020)「知識と対象」『東京大学言語学論集』42 : 283-295。

<sup>10</sup> より正確に言えば、(19) としても概念化できる関係が含まれているということである。